

INFORMATION PHYSICS AND COMPUTING

東京大学 工学部計数工学科システム情報工学コース

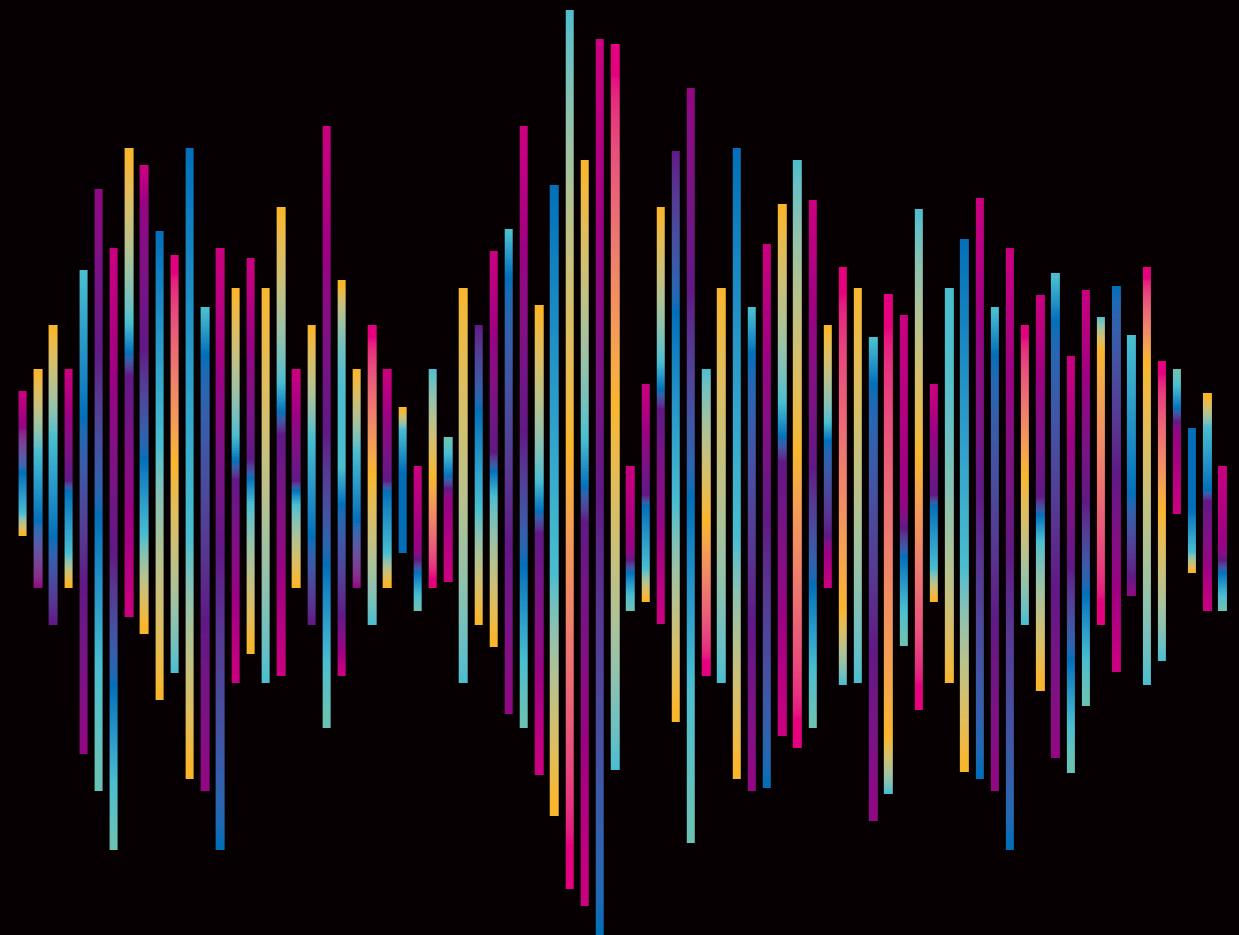
東京大学 大学院情報理工学系研究科システム情報学専攻

Department of Mathematical Engineering and Information Physics, School of Engineering, The University of Tokyo
Department of Information Physics and Computing, Graduate School of Information Science and Technology, The University of Tokyo

東京大学大学院情報理工学系研究科システム情報学専攻
東京大学工学部計数工学科システム情報工学コース
専攻 / コースガイド 2018

【東京大学大学院情報理工学系研究科システム情報学専攻 / 東京大学工学部計数工学科事務室】
〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1 TEL 03-5841-6888
<http://www.i.u-tokyo.ac.jp/edu/course/ipc/index.shtml>
<http://www.keisuu.t.u-tokyo.ac.jp>

2018年4月発行



物理世界と情報世界を 繋ぐ。

システム情報学が目指すのは、物理世界と情報世界を繋ぐ「認識と行動」の学問である。

「認識」とは、対象とする物理的世界から収集（計測）された要素情報の処理および解析に基づく知識レベル情報の抽出であり、物理世界を情報世界に射影する。

一方、認識の結果得られた物理世界のモデルに基づいて合成と予測を行い、目的を実現するための対象への働きかけ（制御）を行うのが「行動」である。

本専攻では、この「認識」と「行動」に関する全ステップを対象として、新しい理論とアルゴリズムを追及し、これに基づいて新しい機能のシステムを実現しようとしている。

研究分野は多岐にわたり、現在は下記のキーワードを中心とする研究が精力的に行われている。

Key Words

認識

生体生理工学 / バイオサイバネティクス / 知能化センサ / 画像と音声の認識と合成

行動

システム制御理論 / システム信号処理論

物理

情報物理学 / 計測センシングシステム

情報

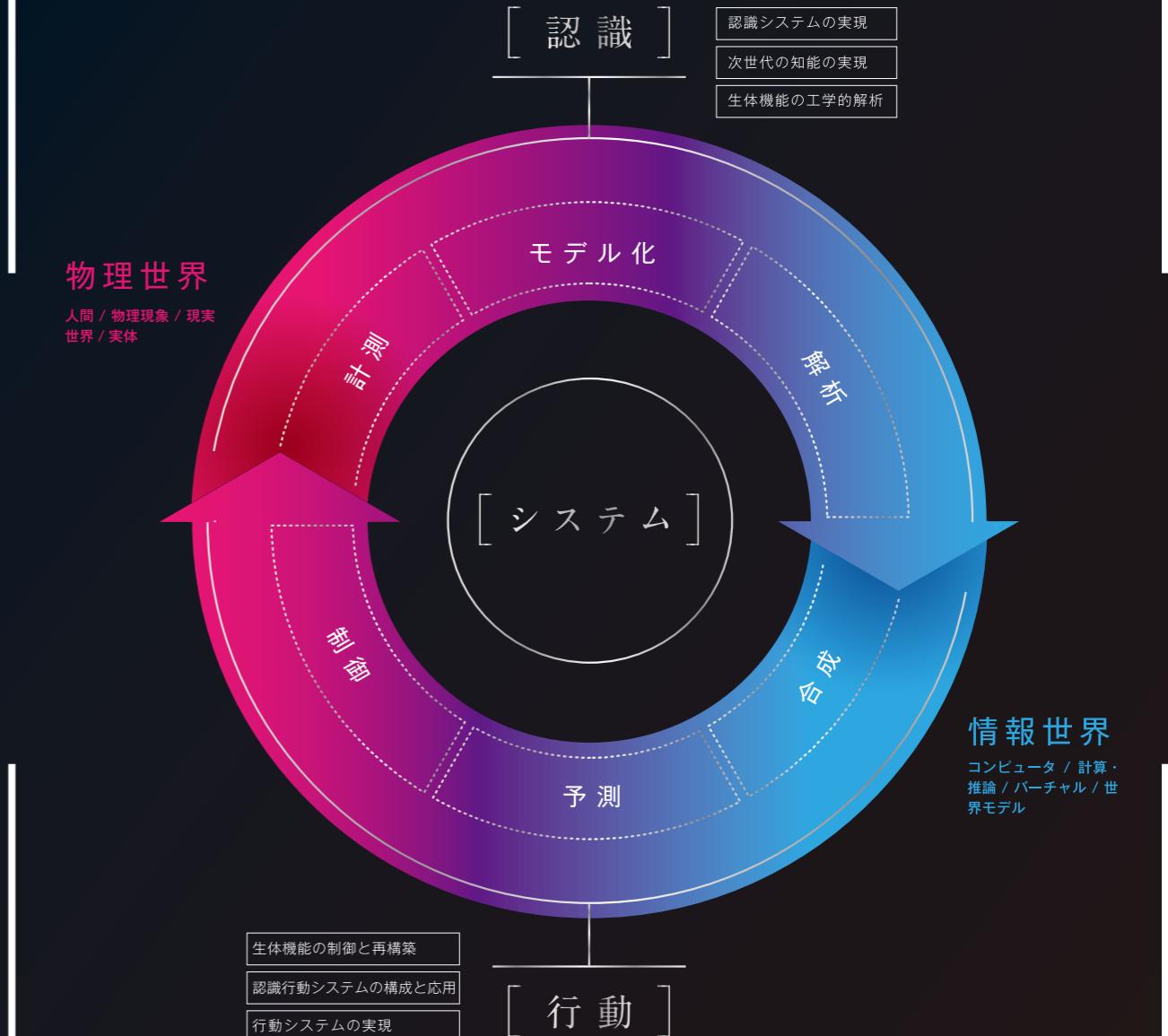
コンピューティング / システムアーキテクチャ / 集積化知能システム

総合

バーチャルリアリティ / 高速ロボットシステム / 認識行動適応学習システム

Image of

「認識と行動」の学問



Contents

対談「奈良・稻見 システム情報学を語る」	01
学部から大学院へ	05
卒業生・学生の声	07
研究室紹介	10
沿革	24



奈良・稻見

システム情報学を語る

ようこそ！システム情報へ／

「システム情報学専攻 / システム情報工学コース」とはどんなことを学んでいく場所であるのか、奈良先生と稻見先生にお話いただきました。

【奈良 高明】

東京大学大学院情報理工学系研究科システム情報学専攻 専攻長
東京大学工学部計数工学科システム情報工学コース コース幹事

【稻見 昌彦】

東京大学大学院情報理工学系研究科システム情報学専攻 専攻主任

「方法論を作る」というコンセプト

■計数工学科はどんな学科なのでしょうか。

奈良 工学部の応用物理学科が、物理工学科と計数工学科の2つに分かれたことによってできた学科です。計数工学科の元々の趣旨は、数学、情報、物理を中心として、それらを社会の中で役立つ工学に応用していくというものです。計数工学科の中には、数理工学コースと、昔は計測工学コースという名称だったコースがあって、数学から情報の部分に重心を置く数理工学コースと、情報から物理の部分に重心を置く計測工学コースが相補的に学科を運営してきたという形となります。

稻見 情報工学という学問が登場する前に、情報的な研究を東大の中でも一番行っていたのが計数工学科とも言われていますよね。

奈良 はい。そして近年になって、計測工学コースはシステム情報工学コースという名前に変わりました。

他学科との違いは、他学科が対象をベースにした学問、対象に対して最適な科学技術を作ることをコンセプトとするのに対して、計数工学科は対象は何でもよく、むしろ、どんな対象にでも通用する「方法論を作っていく」ということがコンセプトであるところです。物理・数学・情報の基礎的な学問をベースにして方法論を作っていく、様々な対象に切り

込んでいく学科です。

駒場生は理学部と工学部で選択をすることがあると思いますが、我々は工学部の中で非常に理学部寄りの学科と言えます。基礎に近い学科なのです。高校時代というのは工学に触れる機会がなかなか少ないですが、実は理学部的なものを社会に応用するという道が、工学では開けています。数学と物理が好きで、何か新しいこと、役に立つことをしてみたいという駒場生には、計数工学科はぴったりだと思います。

稻見 手法の学問なので、応用分野も非常に多岐にわたっています。ロボットの先生もいれば、計測の先生もいれば、制御理論などに深く関わっている先生もいます。先程、物理・数学・情報の3本柱という話が出ましたが、最近だと脳や医用工学など生理に根差した研究を行っている先生もいらっしゃいます。私もそうですし、眞溪先生、生田先生、上田先生のところなどはその傾向がありますね。

そういう意味では、学科としては手法を学んで、応用に関しては各研究室に配属されることで学ぶことができる、つまり知らなかつた分野を勉強してからやることを選べるというのも、計数工学科を選択する一つの理由になると思います。

奈良 そうですね。

稻見 どの研究室にいっても、計数的方法論と申しましようか、原理原則に立ち返って、モデルなどを意識しながらシステムを設計していくとか、理論もきちんと考えながら応用を考えると、そういう研究の進め方を学ぶことができます。そこで学んだことは、実は意外と流行り廻りに左右されないんです。思考のフレームワークというか、哲学なんですよ。分野が変わったり、時代が変わったりしても、時代に合わせて考え方を適用すればいいだけで、そういう意味では10年、20年たっても、システム情報で研究したことの応用分野は変わるかもしれないけど、そ

の研究をやるときに培った方法論や考え方は廃れることはない。それは、すでに世界で活躍している卒業生の方々もその証拠だと思います。本当に色々な分野でOBOGが活躍しているので。

互いに相互補完的な2つのコース

■数理情報工学コースとシステム情報工学コースの違いを教えてください。

稻見 奈良先生は数理情報工学コース出身で、システム情報学専攻に移られた方なんですよ。両方をご存知なんですね。

奈良 はい、2つのコースではあるんですけど、1つの学科なので、教育体制としても行き来できるようになっています。具体的には、どちらのコースに属していても、もう一方で卒業論文を書くことができる交換指導という仕組みがあります。私はその仕組みを使って、卒論からシステム情報の方に移ったというバックグラウンドがあります。違いとしては、最初にも言いましたが、数学・情報に重心を置くか、物理・情報に重心を置くか、という点はあります。ただ卒論でコースを移ってみて、こんなにも数理の使える世界があったのかと思ったことからもわかるように、非常にオーバーラップする部分も大きいです。

稻見 システム情報の方は、実世界がだいぶ入っていますね。

奈良 そうですね、物理と情報をキーとして、工学的な応用を作っていくというコースですね。

稻見 またそれぞれのコースが相互作用を及ぼし合っているので、物理が好きだからシステム情報工学がいい、数学が好きだから数理情報工学がいいかというと、単純にそうではない。だからこそ今の興味と逆方向にいくと新しいことができるかもしれないという考え方もあります。

数学が得意な人が、実世界に根差した問題にチャレンジすることによって今まで解けなかった問題が解けたりとか、あるいは物理が好きな人が数理的なところに行くことによって、今までに考えなかつたような応用、数学的な見知とつながりがあると思います。

例えば昔いらっしゃった杉原先生^{*}の錯覚情報学ですね。杉原先生は数理の先生ですが、ロボットの視覚を数理的に解析していたら錯覚自体が設計できるようになったという話です。錯覚という非常にシステム情報工学的であるテーマにおいて、数理の先生がすごく大きな仕事をされたんですね。逆に数理出身奈良先生は触覚のバーチャルリアリティやセンシングに数理的にアプローチすることで大きな仕事をされている。このように、互いに人が移動することによって、研究・分野としての交流が生まれ、新しいことができる。これが、2つのコースと一緒にやっている意味ですね。

*杉原厚吉 東京大学名誉教授：現在は明治大学研究・知財戦略機構特任教授(2018年2月現在)

2つの世界の間のループを回す

■システム情報学専攻の研究室では、どのような研究が行われているのでしょうか。

稻見 基本的に全ての研究室がなんらかの実世界、つまり物理世界と情報との間に関わるような研究をやっていると思います。そのための道具として、数学とか物理を使っているところが多いという感じでしょうか。必ず片足は実世界に足をついているというところがポイントです。

その中で具体的な分野としては、ロボットやバーチャルリアリティ、音声情報処理やオペレーティングシステムなど、様々な応用をやっています。私も最初は、なんでこんなにバラバラな先生たちがまとまっているんだろうと分からなかったんです。でも、卒論や修論の発表を通して聴いたりすると、何か基本となる考え方があるんだなというのが透けて見えるんです。その時に私も、会得できたかどうかは別として、そういう方法論があるんだなというのが分かった感じがします。

例えば、茶道ってすごいんですよ。お茶の様式・フィロソフィーがあることによって、行儀作法もできれば、器もできれば、茶菓子、茶懐石もできたわけで、服も変わってくる、建物もできる。そういう哲学がものすごく広い分野に関わってくる。それに近いような気がします。形から見れば、建築という側面もあれば、鉄物を作る側面もあれば、行動という側面もあって、多くの工学研究の場合そちら側からアプローチするわけですが、我々はお茶という考え方によって実は全部通底する部分がありますよね、というところを探っていくところなのかもしれません。また建築とか、鉄物とか、器とか、それらをつなげることによって、全体の価値を高めるということになるとも言えます。

奈良 そうですね。稻見先生の例えとは少し違う言い方になりますが、実世界、社会の中に、生体でもいいし、ロボットでもいいし、災害救助、環境問題、エネルギー問題など、色々な対象があるわけです。一方で、情報・数理モデルの世界があり、その2つの世界を循環する必要があるって、その循環のなかの各部位を、各研究室が専門的にやっていると言えます。例えば実世界の中で何かを実現したいと思ったら、まず実世界でキーとなる物理量を計測しないといけない。生体の義手義足を作りたい場合でも、医療用のシステムを作りたい場合でも、対象がどういう性質を持っているかを量定化しないといけない。そこがセンサーとか計測とかの研究です。それで次に、計測したものを数学的に解析しようとすると、そこで数理モデルというものが需要で、解析、信号処理、コンピューティングなどの学問が必要になってきます。そして解析したら、今度はそれをもとに実世界に働きかける、その最適な方法を設計するのが制御工学です。それが一巡すると、実世界に働きかけることができ、望みの機能を実現していくことができるということになるわけです。どんな対象に対してもそのサイクルが回っていることが、工学としては必要だということです。

その観点で俯瞰的に捉えると、それぞれの研究室はそれぞれの場所を特に専門的にやりつつ、全体として知識を持っていて、システム全体として設計できるようになってくる。

稻見 そのループを回すんだということが、方法論だということです。そのループの中で、認識するだけのところもあれば、働きかけるだけのところもあるんですよね。ただ、それを少なくとも専攻全体としてはつなげてやるんだということが、ポイントだと思います。

■認識・行動・システムのループがシステム情報工学コースの核であるということですね。

稻見 はい。もう一つ例え話を紹介すると、これは昔、館先生^{*}がおつ



しゃっていたことなのですが、我々がやっていることは宝探しに近いかもしれないで、海の底に沈んでしまった船をトレジャーハンターが探しに行き、研究で言うなら現象をみつけたり、新しい発見をしたり、それはそれで大切で、探すべきことはたくさんあるんです。ただ、見つけたものは、地上に引き上げないと価値にならない。我々は見つけたものを地上に引き上げて、色々な人達が意味や価値を感じてくれるところまで持っていく、そこが大切なよということをおっしゃっていました。これもループの話の「実世界に戻す」というところにつながっていると思います。見つけて分かっただけではだめで、それでまた世の中、実世界に働きかけるっていうことをしないといけない、と。

*館暲 東京大学名誉教授：現在は東京大学高齢社会総合研究機構所属(2018年2月現在)

■すごく色々なもの間をつないでいる学科・学問ですね。

稻見 そうですね。

奈良 そう、実世界と情報世界と、という観点もありますし、最初に少し話した理学と工学という観点もありますし、つなぐ学問ですね。今の海の話もそうです。



Masahiko INAMI

サイエンスレイヤーでイノベーションを支える

■奈良先生、稻見先生の研究室ではどんな研究をされていますか。

奈良 私は計測工学の研究室で、実世界から情報をセンシングしていくことがテーマです。例えば医療応用とか非破壊検査などの逆問題と呼ばれる問題に取り組んでいます。医療応用で言うと、人体の内部をイメージング、映像化することが一つのテーマです。がん細胞などは、健常部位に比べて導電率という電気的な特性が大きく違うことが知られていて、通常のCTやMRIで、構造を見ただけだと見つけづらい初期ガンが、実は電気特性で見るとそこだけ異常に数値が高いことがあって、それを画像化できると非常にありがたいわけです。そのためには磁場を計測し、検出するための数理的手法の開発を行っています。あとは、脳磁場計測による医療応用もあります。例えば、てんかんの病巣は、異常に電流が強く流れてしまう場所なのですが、これも通常のCTやMRIの画像では病巣として見えないんです。人間の脳が活動すると頭の外側に磁場がもれてくるので、その脳磁場を計測しておいて、異常に電流が強く流れる場所が推定できると、治療計画に役立つわけです。

非破壊検査も数学的には同じような構造です。構造物とか、配管とか、具体的に言うと火力発電所のパイプなどは老朽化しているものがあつて、それを電磁気を使って効率良くどこに傷があるかを見つけたりします。また、そのための最適な新しいセンサの開発も行っています。そういう一連の話が、実は数学的には共通しているということがあります。それはやっぱり計数的なんですが、数理モデルを使って、色々な対象にそれを適用する、実は一つ方法論を作つておくとそれを色々なところに適用できる。そういうスタンスです。

稻見 奈良先生の話でそれがまた計数っぽいなと思うところは、検出するセンシングだけだったならまた別の方法でもあるかもしれないけど、それをきちんと映像に戻しているところが、実世界に戻すところまでちゃんと入っているというか、認識・行動・システムのループになつているのかなと思います。未知のデータを検出するということと、それをわかりやすく提示してあげるというのは、意外と大切なんじゃないかなと思います。

奈良 はい、人間の五感に働きかけるのもシステム情報の重要なポイントですね。

稻見 私の研究室は、基本的には人間の認識行動システムというところに興味がありまして、人が世の中をどのように感じて、それに基づいてどのように行動するのか、というのを、様々なアプリケーションによつ

て、モデル化まではきちんとできるか分からないけれども、ある程度通じる部分を見つけていくということをやっています。そのための、人を知るための手法として、バーチャルリアリティというのは非常に良い実験室なんですね。なぜかというと、人間の様々な五感に対して働きかける環境を、再現性高く提示してあげられるからです。そういうものを道具として使いながら、情報システムとしての人間というものを理解する。理解することによって、今度は人が能力を強化する人間拡張工学だとか、新しいコミュニケーションシステムを開発したりとか、建設機械の操作性を上げたりとか、おもしろいゲームを作るための設計論を提示するとか、全然違う業界の役に立てていこうというところが、ラボとして取り組んでいるところです。

■やはり一回情報を取り出して抽象化し、それを実世界に返すというところがありますね。

稻見 はい、抽象化と具体化というところのループですね。一度抽象化すると、今まで見えていなかったアプリケーションがたくさん出てきます。そして、抽象化した部分を介すことによって、分野を超えた色々な業界とつながることができるというのが特徴的ですね。これは大学にいることの一つの価値とも言えます。私もまさかゲーム業界の見聞が建設機械業界に活きるとは思いませんでしたが、話を聞いてみると同じ問題を抱えていたんです。でもそれに気づくことができたのも、一度抽象化の視点が入ったということと、大学という場にいると様々な産業の人達と出会うこともできるからということと、その2つによってなされていいるところですね。本来はつながらない複数の分野を新しい組み合わせでつなげて価値を出すということが、シェンパーーが定義した元々の「イノベーション」なんですが、そういうことを考えても、システム情報学は意外と一番、イノベーションの部分をサイエンスとして支えることができる体系であるとも言うことができます。我々が何か作ったり、考えていく時に、原理原則の部分でつながるところを探していくというか、「実はこの2つは抽象化してみると同じ問題じゃないか、だから絶対これらを組み合わせると相性がいいはずだ」と、直感ではなく確信をもってつなげられるところが我々の強みかもしれないです。

奈良 その時にやっぱり数学と物理は根拠になるんですよね。

稻見 中立的な言語ですからね。世の中の現象とか人間の考え方を抽象化しようとして一番記述しやすい言葉が数学と物理だと思います。

道具を手に入れ、視野を広げる学部時代

■学部生時代にはどういうことを学ぶことができるのでしょうか。

奈良 昔からカリキュラムとして5本柱があって、回路学、信号処理、制御工学、認識行動システム論、計算システム・コンピューティング、の5つですね。

稻見 最初の3つがまさに基本となる道具ですよね。つなげるための道具箱として前半の3つがあって、後半の2つがつなぎ方、あるいは世の中がどうつながっているのかを知る方法論かもしれません。前半はシステムを理解したり作ったりするための道具で、システム論が後半とも言えます。

奈良 さっきのループで言うならば、特にやっぱりセンシングの部分では回路が必要になってくるし、信号処理というのは観測してきたデータをどう解析するかという学問で、対象に働きかける部分が制御工学で、各部分で必要になってくるツールがその3つです。認識行動システムというのはその全体のループに関わりますし、計算システム・コンピューティングはシステム全体として最適なコンピューティングを進める方法論となります。

稻見 最初の3つのバッチをつなげてループとして考えられるのが後半の2つということです。情報により近いシステムとして計算システムというのがあって、物理により近いシステムとして認識行動システムがある。信号処理してはじめて物理が情報になるんですね。

また、システム情報の特徴として、とにかく学生は研究室を色々回る仕組みになっています。他大学でよくある、3、4年生くらいから特定の研究室に所属して色々やってというのは、早めに論文を出すことなどについては確かに最短経路なんですが、我々はあえて学部と大学院も研究室を変えることを強く推奨しているんです。3年生の実験でもプロジェクト演習とかがあるんですけど、とにかく色々な研究室を体験することになっていて、それこそがまさに我々の考え方を体现するカリキュラムなんです。回ることによって、通底することが分かるんですよ。一つの研究室しか見ないと、通底することが分からないんですね。いま興味のあることを深めるのも大切ですけど、色々な研究室を回っていくなかで、興味無かつたけれどやってみたら面白かったという話もたくさん聞くんです。

多様性のなかで生まれる価値

■システム情報工学コース／専攻はどういう雰囲気のところですか。

奈良 すごく研究対象・テーマが広いところなので、やっぱり集まって輪講などをやると色々な話題が聞けるし、そういう人たちが研究室を越えて自然とディスカッションするので、興味が広がっていきます。みんなそれぞれ違うテーマを扱っている中で、共通言語を探そうとするので、それを通して共通の価値がだんだん育まれていくという環境があります。

稻見 ダイバーシティが大きい中で、みんなが頑張ってコミュニケーションしようとする過程そのものが、実は抽象化が入っているのかもしれない。それがつなぎ方とも言えますよね。数学レイヤーとか物理レイヤーとかでつながることもあるけれど、コミュニケーションレイヤーでも、分野が違うように思ってもたぶん根っこはつながっているはず、という確信に基づいて話すとお互いに分野のつなげ方も分かってくる、という感じがあります。意外とこの価値は、卒業してから役立つこともありますよね。

知らないことにチャレンジを

■最後に、学生に向けて一言お願いいたします。

稻見 大学院の話をすると、大学院って、どうしても研究室という狭い

組織に所属して、その中で問題解決をしていくというふうに思いがちなんんですけど、せっかくなのでぜひとも色々な研究室のぞいたり、同じ専攻の友達を増やして議論したりして、システム情報らしさ、計数らしさを身につけて欲しいと思います。学部生は、目先の応用などにとらわれないで、原理原則に則って考え方を身につけてください。我々は考え方や方法論の学問なので、そういう考え方を、色々な分野の先生の研究・講義や、友達との交流のなかで、手に入れてほしいと思います。

奈良 その点は私も同じですね。私は自分の大学院入試の面接の時に、福祉工学をやりたいと言ったら、ある先生が「いや君、福祉工学の研究をやるだけが福祉工学に貢献するわけではないんだよ」とおっしゃったんです。一見全然違うこと、例えば画像処理をやっていても、それを福祉の方に適用していくこともできます。対象や目的を決めてやるという学問スタイルもありますが、一見全然違う分野の技術を適用することによって、この分野だけで考えていたら思いつかないような解決策を生み出しができるということがあって、それはこの専攻／学科のすごく本質的なところだと思います。目先の応用にそれほどこだわらずに、ということはまさにそうで、あまり今知っている学問だけで、これだけやりたい、こっちは興味ないと絞り込むのではなく、色々な分野を勉強することが、将来的に新しいことにつながっていくと思います。

稻見 だからむしろ知らないことにチャレンジしてほしいんです。見たことが無い、聞いたことが無いこと。東大という大学自体が、教養学部があることによって高校生の時は知らなかった学間に触れることができて、そこから専門を選ぶことができるのが強みの一つなんですね。そしてまた計数工学科は、入ってから、色々な先生の話を見たり聞いたりすることで、今まで自分の中にはなかった興味を得ることができる場所なんですよ。

お寿司屋さんで、メニューから注文すると、振り返ると自分が知っている食べ物しか食べていなかったりしますよね。そしてそれがその日の仕入れの中で本当に美味しいかどうかかも分からず。だから、うちはおまかせの寿司屋だといつも言っているんですよ。おまかせしてくれれば、我々は自信を持って一番いい素材を出すと。で、そうすると、君の知っている範囲では注文できないような素材が出てきて、こんな食べ方もあるんだと知ることができて、しかもその美味しさも知れるというのが我々のメリットですよ、という言い方をしたい。おまかせ学科ですよ！



学部から大学院へ 多様な学びと多様な進路

2年

冬
コース決定

3年

4年

修士課程

博士課程

計数工学科には数理情報工学コース、システム情報工学コースの2つのコースがあり、その振り分けは学生の希望を基に1月中旬に行われる。その後、各コースに分かれて講義・演習・実験を行う。4年の秋に卒業研究で各研究室に配属されて卒業研究を開始し、2月に卒業論文の提出・審査が行われる。

計数の基礎

- 電磁気学第一
- 回路とシステムの基礎
- 認識行動システムの基礎
- 数学1D
- 数学及び力学演習I
- 計測通論C
- 基礎数理
- 数値解析



工学部 計数工学科 システム情報工学コース

[コース理念]

「認識と行動」のメカニズムの体系的な理解とその工学的実現を目指す。人工物であれ生命体であれ、これをシステムとして見たとき、どのような「機能」が、どのような「しくみ」やどのような「ハードウェア」によって実現されるのか、という問題を扱う。物理・情報・システム系の基本的で幅広いカリキュラムを積極的に生かし、物理と数理のバランスのとれた素養の上に、専門科目の教育を行う。これにより、新しい問題を広い視野から解決できる人材、自ら問題を提起し、新分野を開拓できる人材の養成を目指す。

システム情報の基礎

- 計測、回路、制御、信号処理、システムを5本柱に計算機をベースとした認識行動システムに関する体系化された幅広いカリキュラムを提供している。
- 制御論 第一・第二
- 信号処理論 第一・第二
- 回路学 第一・第二
- 計算システム論 第一・第二
- 認識行動システム論 第一・第二

さらに進んだシステム情報

認識と行動のシステムに関するさらに進んだ講義を通して、広い範囲に及ぶシステム情報工学の様々なテーマを勉強し、新しい学問の現状を深く理解する。

- 画像処理論 ■ センサ・アクチュエータ工学
- 応用音響学 ■ システム情報工学特論
- 生体計測論

両コースの共通科目

- | | |
|----------|------------|
| ■ 数学2D | ■ 光学 |
| ■ 数学3 | ■ 統計力学第一 |
| ■ 数理手法 | ■ 経済工学I |
| ■ 電磁気学第二 | ■ 計数工学特別講義 |
| ■ ナノ科学 | ■ 実地演習 |
| ■ 脳科学入門 | |

数理情報工学コースの科目



卒業論文

研究テーマ例

- VLSI設計
- プロセッサ開発
- 超並列応用
- システム制御理論と応用
- ロバスト制御
- モデリング
- 適応・学習
- バーチャルリアリティ
- 自律分散システム
- サイバネティクス
- ロボティクス
- センサ融合
- 知能化集積センサ
- 画像処理
- パターン認識
- 視聴触情報処理
- 音声・音楽情報処理
- 脳機能計測
- 逆問題



大学院 情報理工学系研究科 システム情報学専攻

[コース理念]

森羅万象を認識と行動のシステム科学の視座から捉え、情報学と物理学を駆使して現象の解析を行って、新しい原理や方法論あるいは機構やシステムを創出し、諸分野での応用を可能とする教育・研究を目的とする。

- 信号処理特論
- 動的システム論
- システム情報基礎論
- 認識システム特論
- 行動システム特論
- 福祉工学特論
- 人工現実感特論
- 戰略型IT特別講義
- 物理情報論
- 計測制御システム論
- パブティクス
- バイオサイバネティクス
- 実世界情報システム講究
- 画像システム特論
- システムアーキテクチャ論
- 脳工学特論
- 逆問題特論
- 音響システム特論
- 脳システム解析論
- 生物物理システム特論
- サイバネティクス・自律システム基礎論

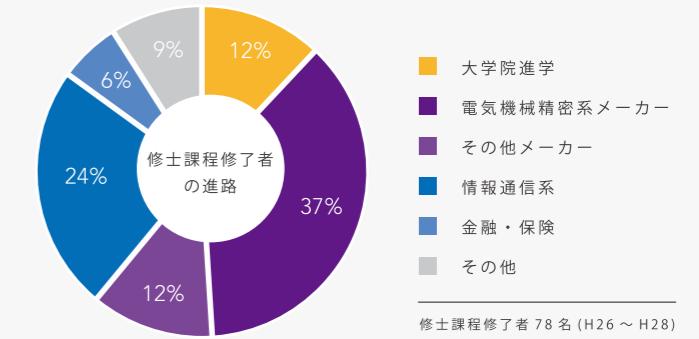
[大学院その他進学先]

創造情報学専攻/新領域創成科学研究科/他大学大学院など



就職

システム情報工学コース卒業生は、大学、研究機関のほか、電気工業、機械工業、鉄鋼工業、化学工業などあらゆる産業分野において研究、開発、設計などの業務に従事している。対象も、計測機器、制御システム、計算機のハードウェアとソフトウェア、ロボット、医療診断システム、音声・文字認識システムなど多岐にわたり、大規模工場の生産自動化システムや生産情報管理システムの分野でも中心的な役割を果している。



卒業生の声 Voice of the GRADUATES



西蘭 良太
Ryota NISHIZONO

プロロード選手として全日本選手権3回優勝後引退
東京大学工学部計数工学科（システム情報工学コース）卒

計数工学科システム情報コースを卒業後、6年間（間に1度一般企業での勤務経験あり）プロロード選手としてフランス、スペイン、オランダ、モロッコ、オマーン、カザフスタンetc。。。と世界中を飛び回り、その中で全日本選手権で3回優勝することができました。

どんなにワイルドな環境でプロアスリートとしての結果を毎年求められる日々でしたが、自分という人間をモデル化して、常にトレーニングの状態を監視するというアプローチで練習を取り組むという手法が心のよりどころになったし、実際にパフォーマンスを向上させてきたと感じています。

周囲を見渡してみると、一つのモデルに囚われてしまう選手は多いですが、その中身をより詳しく理解することでモデルの限界もよく理解できたと思います。所詮モデルはモデルでしかないですから、現実と異なるのが当たり前です。そして現実との差異にこそ最後に人間の感覚でしか捉えられないものが詰まっているという考え方をしていました。

その思考のベースは計数工学科に通いながら、学生アスリートとして戦っていた学部時代にあります。計測・数理工学の根っこは一見全く異なる分野に取り組んでいた私を思つた以上に支えてくれました。遺伝的アルゴリズムによってベースの最適化をしたり具体的に役に立つこともあります。計数的思考こそが学部で得た一番の財産です。



横山 恵子
Keiko YOKOYAMA

生命保険会社 アクチュアリー
東京大学大学院情報理工学系研究科システム情報学専攻 修士課程修了
東京大学薬学部薬科学科卒

学部生の頃は生体に関する分析を行う実験系の研究室に所属しており、大学院ではより数理的なアプローチでバイオに関する研究を行いたいと漠然と思っていた。そんな折、システム情報学専攻にシステムバイオロジーを学べる研究室があると知つてとても魅力を感じ、思い切って異分野の院試に挑戦して所属を変える決断をしました。実際にシステム情報学専攻に進学してからは、制御学という切り口で免疫システムの数理解析をする研究を行いました。理化学研究所と共同研究をさせていただき、in vivoの実験データに対して数理モデル化した後に挙動解析を行うという、まさに私が興味を抱いていた分野に携わることができました。

学部から大学院にかけてフィールドが大きく変わることに不安を抱いていましたが、それは杞憂でした。先生方・先輩方は懇切丁寧に指導・サポートして下さり、学生間でも自主的に輪講や知識を共有する場を設けるなど、周囲から良い刺激を受けつつ多くの学びを得られる環境でした。

現在は、生命保険会社でアクチュアリー（数理専門職）として働いています。大学院での研究が直接関わる業務内容ではないですが、業務上分岐点に直面した時や説明を行う際などに、本専攻で培われた論理的思考力や説明能力が生かされていると痛感しています。優秀でモチベーションの高い学生と上質かつ充実した指導体制に恵まれた本専攻でこそ、進路を問わず活きる力を養えると、私は考えます。



吉田 匠
Takumi YOSHIDA

三菱電機株式会社
東京大学大学院情報理工学系研究科システム情報学専攻 修士課程修了
東京大学工学部計数工学科（システム情報工学コース）卒

私は、中学生の頃にオープンキャンパスで「歌詞を入力すると自動で作曲をする」研究紹介を見たのがきっかけとなり、東京大学の工学部計数工学科を目指すようになりました。

計数工学科4年次で逆問題・画像処理・超音波に関する各研究に触れた後、大学院進学時には中学生の頃から憧れていた音響信号処理分野の研究室に配属され、現在では音源分離を中心とした研究を進めているところです。計数工学科の学部生向け講義は、数学や物理といった基礎科目が大変充実しています。音源分離は1990年台後半より活発に研究が進められてきた分野ですが、学部のころに身に着けた信号処理や数学、最適化手法などに関する基礎的な知識は、（伝統的・最先端を問わず）様々な音源分離の手法を理解したり、新たな手法を考案したりする上で大いに役立っています。

また、学部4年生で3つの研究室を回ることができる計数工学科独自の制度は、多様な分野の最先端に触れ多くの技能を身につけることができた他にも、自分の興味や将来取り組みたい事についてじっくり考える良い機会となりました。多くの講義を共にする物理工学科の方々も含め、大変優秀な同期に恵まれており、貴重な20代前半の数年間を刺激的な環境で過ごすことができる素晴らしい環境だと思います。



夜久 真也
Shinya YAKU

NEC ものづくり統括本部 兼 データサイエンス研究所
東京大学大学院情報理工学系研究科システム情報学専攻 修士課程修了
東京大学工学部計数工学科（システム情報工学コース）卒

学生時代はシステム第六研究室で、高速視線制御装置(1ms Auto Pan-tilt)を使った物体追跡技術の研究をしていました。計数工学科、そしてシステム情報コースを選んだのは当時の完全なる気まぐれですが、「面白い事をやっている研究室が多い」という印象が強かったのだと思います。実際どの研究室も最先端の研究テーマと成果を持っていますし、ここまでメディア露出の多い学科は他に知りません。

NECへ入社後はグローバルSCM改善や生産革新といった毛色の違う仕事を就いていましたが、最近縁あって出身研究室との共同研究にお声かけいただき、5年振りの研究生活を始めることになりました。まさかこのような形で再び先生方にお世話になれるとは思つてもいなかつたので非常にワクワクしています。

モノを作つて動かすには機械/電気/制御の知識（と実践経験）が不可欠ですが、大抵の技術者はどこかの分野に閉じています。システム情報コースはこれらをバランス良く学んで視野を広げられる貴重な環境だったのだな、と改めて実感しつつ、すっかり知識の抜けた頭で教科書を読み返す今日この頃です。



黒木 忍
Shinobu KUROKI

NTTコミュニケーション科学基礎研究所
東京大学大学院情報理工学系研究科システム情報学専攻 博士課程修了
東京大学工学部計数工学科（システム情報工学コース）卒

計数工学科でシステム・情報・物理領域などを学んだ私は、大学院では脳波信号処理を研究テーマに選びました。信号処理については学科でも学んでいましたが、そこに統計学における知見を付け加えたり、携帯電話のコーディングにも用いられている擬似乱数系列の理論についても新たに学び、研究に適用してきました。このような、幅広い分野にわたった知識をもとに新たな問題を解くというアプローチは、本専攻で行われる研究の特色のひとつです。輪講などで触れる他の学生の研究も非常にユニークかつバラエティに富んでおり、非常に良い刺激になったのを覚えています。

現在は企業でエンジニアとして勤務しており、ウェブ検索一発回答エンジンの研究開発を行っています。大学で培った統計・機械学習などの素養は現在も武器になっている一方、新たに自然言語処理やグラフ理論などを学ぶにあたっての素地が自分の中に確立されていたことにも気づきました。激動の21世紀において、研究者・技術者はこれまで以上に世界の変化への対応力が問われる時代に突入するかと思います。多様な分野にわたる基礎力を養い、新しい問題を解決する力を培うチャンスに溢れている本専攻は、これから世界を生き抜くための基盤が得られる絶好の場所であると確信しています。



吉田 匠
Takumi YOSHIDA

株式会社ソニー・インタラクティブエンタテインメント
東京大学大学院情報理工学系研究科システム情報学専攻 博士課程修了
東京大学工学部計数工学科（システム情報工学コース）卒

工学部計数工学科、そして大学院情報理工学系研究科で学び、研究に没頭した7年間は今の自分にとって欠くことのできない大きな財産です。

学部時代は、様々な分野を「広く深く」学べる計数工学科のカリキュラムによって、多角的に物事を捉える視点を養えたと思います。特に、4年生の前期実験や卒業論文で異なる研究室・研究テーマを選べたのは自分の適性を知る上でも非常に役に立ちました。卒論は制御理論の研究室で、紙と鉛筆でひたすら式と格闘していました。学会発表や論文誌への投稿も初めて経験しました。

大学院ではVRの研究室に所属し、卒論とは対照的な物作りの日々が始まりました。システムの試作や実験のため、金属加工、はんだ付け、3Dプリンタなど色々な技術を学びました。修士論文・博士論文の研究テーマに選んだのは拡張現実感（AR）インターフェースでした。研究成果はアメリカのSIGGRAPHを始めとする国際会議や展示会に何度も出展しました。自分の研究を沢山の人に体験してもらつて良いフィードバックが得られたときの嬉しさは格別でした。

現在はゲーム会社でVR/AR技術を使ったゲーム制作に携わっています。専門のVR/ARの知識はもちろん、研究の過程で得られたプログラミング、CG、画像処理、触覚インターフェースなどの知識・経験もゲーム制作に大いに役立っています。



黒木 忍
Shinobu KUROKI

NTTコミュニケーション科学基礎研究所
東京大学大学院情報理工学系研究科システム情報学専攻 博士課程修了
東京大学工学部計数工学科（システム情報工学コース）卒

現在は企業で人間の脳内情報処理について調べる研究をしています。学部生時代はディスプレイのハードウェア、ソフトウェア部分を作っていました。院生時代にディスプレイによって生じる知覚のモデル化を試みたことで、徐々に人間の知覚メカニズムそのものに興味が向き、今では知覚心理学を専門としています。

私が在籍した当時、システム情報コースは信号処理・電子回路・制御論を軸としてバラエティに富む研究室が存在し、また研究室内にもロボット系・カメラ系・触覚系とダイバーシティがありました。全てを吸収することは到底出来ませんでしたが、周囲の話題が広かつたことでなんなくでも知っている事が増え、その結果新しい事に苦手意識を持たずに向き合えている気がします。クラスメイトの得意とする事も各々異なり、良くも悪くも粒がそろっていないのが面白かったです。変化の激しい時代に向かう上で、有意義な経験だったと思っています。

学生の声 Voice of the STUDENTS



「味曾野 雅史」

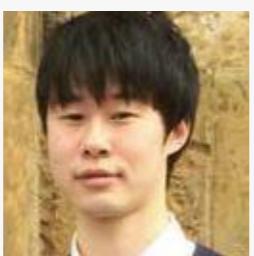
Masanori MISONO

システム情報学専攻 博士1年

私の研究

私は常々計算機の動作原理に興味があり、簡単なCPUやOSの作成などをやってきました。その中でもハードウェアとアプリケーションの橋渡し的存在であるシステムソフトウェアに特に魅力を感じ、現在の研究室に進学しました。システムソフトウェアは普段意識することは少ないかもしれません、様々な構成要素からなる計算機をまとめるために無くてはならない存在であり、だからこそ面白いのだと思います。

システム情報学専攻の中ではコンピュータサイエンス系の研究は少し珍しいかもしれませんが、様々な専門領域を持つ研究室が存在することが本専攻の一つの魅力。他分野の最先端研究を知ることは刺激になりますし、様々なバックグラウンドを持つ人と議論ができることも自身の研究生活に大きなプラスとなっています。



「伏見 幹史」

Motofumi FUSHIMI

システム情報学専攻 博士1年

専攻/コース選択の理由

大学入学時から数学と物理に興味があり、数物系の学科・大学院に進学するという意志は固まっていました。数学と物理それに対する興味以上に、これらの学問の密接な関係性や、数理的・物理的な理論を背景に現象を解析していく過程面白さを感じていたため、計数工学科を選択しました。

物理現象に対する洞察を大事に、実世界の問題に対し社会の要請に応える解決策を提示したいという思いから、システム情報工学コースを選択し、本専攻に進学するにいたります。実際、数理・物理の理論からシステムの構築にいたる工学的営みを、その一連を通して実践できることは、本専攻の大きな魅力であると思います。



「高橋 謙子」

Ryoko TAKAHASHI

システム情報学専攻 修士2年

後輩へのメッセージ

人間の認知に興味をもち、学部で脳科学に触れたのちに、現在は超音波デバイスを利用した皮膚への触覚付与について研究しています。

本専攻では多様な研究が行われており、また大学院に入学してから新しい研究分野をもつ学生が多数となっています。しかし、学問としての基礎は分野を横断して共通しており、専攻内輪講では異なる視点からの本質的な質問を受けたり、新しい知見が得られたりすることもあります。ぜひ、様々な分野に触れた上で、自分にとって魅力的だと感じるところでの新しいものを切り開いていくください。



「上野 洋典」

Yosuke UENO

システム情報学専攻 修士2年

専攻/コース選択の理由

なんと言っても研究領域の幅広さが魅力でした。

4年前期に2つの研究室を回ることができ、さらに学部と修士課程で研究室を変える必要があるというのは、他の学科でも類を見ない計数の特色だと思います。

修士1年のはじめの頃は、他学科の同級生に比べて専門性に欠ける気がして少し不安になりましたが、長い目で見れば学部から修士にかけて様々な研究室を回っていたことが自身の研究に活きていると感じます。

また、他の専攻に比べて研究室間の横つながりが強く、研究室のテーマや方向性に捕われすぎずにフレキシブルに研究ができる環境であると思います。



「井川 翔太」

Shota IKAWA

システム情報学専攻 修士2年

私の研究

私が取り組んでいる研究は音情報を中心とした自然言語生成です。計算機を用いて音響信号を認識し、その音に含まれる情報を文や単語といった自然言語を用いて記述する事が目標となります。1つの音に対してそれを記述する正解が多数あり、挑戦的で興味深いテーマであると自負しております。この研究は人間の知覚および表現を機械によって再現するという側面を持ち、ユーザーに寄り添ったインターフェースが求められる現代において社会的需要が高まっていくことが予測される研究であると考えています。



*敬称略・順不同



Laboratories

システム情報学関連研究室一覧

第1研	猿渡 洋 教授 小山 翔一 講師	[音声・音響信号処理] [音楽情報処理] [統計的信号処理] [機械学習] [非線形システム解析] [音場解析と逆問題] [音響信号処理] [音場再現] [音響バーチャルリアリティ]
第2研	眞溪 歩 准教授	[信号処理工学] [脳機能計測] [脳機能介入] [認識行動科学]
第3研	奈良 高明 教授	[逆問題] [間接計測] [非侵襲計測] [非破壊検査] [音場計測と信号処理]
第4研	篠田 裕之 教授 牧野 泰才 准教授	[触覚インターフェース] [触覚・生体情報のセンシング] [二次元通信] [センサネットワーク] [触覚センサ] [触覚ディスプレイ] [触覚情報処理] [マン・マシンインターフェース] [身体動作推定]
第5研	津村 幸治 准教授	[制御理論] [システム同定] [情報理論的システム解析] [量子制御] [ネットワークド制御]
第6研	石川 正俊 教授 妹尾 拓 講師	[システムアーキテクチャ] [センサフュージョン] [ビジョンアーキテクチャ] [ダイナミックイメージコントロール] [メタバーサイズション] [センサフュージョン] [感覚運動統合] [多指ロボットハンド] [二足ロボット] [ダイナミックマニピュレーション]
第8研	中村 宏 教授 近藤 正章 准教授	[コンピュータアーキテクチャ] [VLSIシステム] [並列分散コンピューティング] [デイベンダブルコンピューティング] [マイクロプロセッサ] [ハイパフォーマンスコンピューティング] [コグニティブコンピューティング]
第9研	生田 幸士 教授 池内 真志 講師	[医用マイクロマシン] [医用ロボティクス] [ナノロボット] [化学IC チップ] [疾病早期発見デバイス] [医用メカトロニクス] [医用工学] [MEMS] [バイオメディカルデバイス] [微細加工] [微細操作] [再生医療] [バイオマテリアル]
先端研	稻見 昌彦 教授 檜山 敦 講師	[身体情報学] [人間拡張工学] [バーチャルリアリティ] [拡張現実感] [ウェアラブル技術] [エンタテインメントコンピューティング] [複合現実感] [ヒューマンインターフェース] [ジェロンテクノロジー] [空間型メディア]
連携講座	柏野 邦夫 客員教授	[メディア情報処理] [高速情報検索] [音声・音楽情報処理] [音響情景分析]
協力講座 情報基盤センター	品川 高廣 准教授	[オペレーティングシステム] [システムソフトウェア] [仮想化技術] [セキュアコンピューティング]
協力講座 医学系研究科	上田 泰己 教授	[システム生物学] [合成生物学] [全脳全細胞解析] [睡眠覚醒リズム]
協力講座 数理・情報教育研究センター	斎藤 洋 教授	[推定可能性] [森羅万象センサ化アルゴリズム] [応用システム]

第1研

システム情報

猿渡・小山研究室

<http://www.sp.ipc.i.u-tokyo.ac.jp/>



猿渡 洋 教授
Hiroshi SARUWATARI



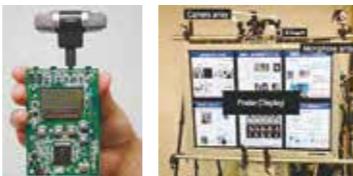
小山 翔一 講師
Shoichi KOYAMA

Theme

主に音メディアに関する現象の理解・情報処理・制御を目指し、波動場を意識した新たな信号処理の創出及びそれを応用した情報処理システムの構築に関して研究を行う。具体的には、対象波動がその生成源や伝搬環境による物理的制約や統計的性質を有することに着目し、それらを効率的に取り扱うことの出来る新しい統計数理モデルと機械学習理論の構築を通じて、人間の音情報処理能力の拡張や新しい芸術創出への工学的貢献を目指す。

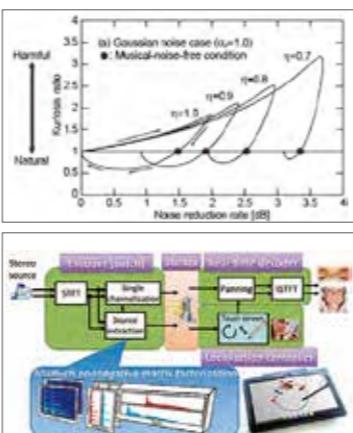
教師無し最適化に基づくコミュニケーション拡張

統計的信号処理理論やスパース・低ランクモデリング理論を駆使し、柔軟なブラインド信号処理系及びユニバーサルコミュニケーション支援システムの構築を行う。



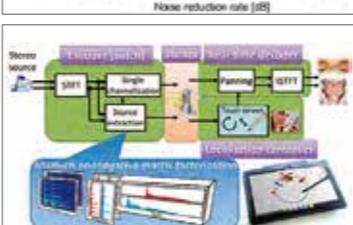
非線形信号処理系の数理解析と感性定量化

非線形信号処理系の低次・高次統計量空間に存在する聴覚印象の不動点に基づき、人間にとつて聴覚的に意味のある統計的信号推定方法は何かを追求する。



ユーザオリエンティドな音楽情報処理

多様な多次元音楽メディアに対し機械学習論的な手法を適用し、時空間頻出パターンに基づく高品質かつユーザオリエンティドな音楽情報処理系を構築する。



音場を対象とした逆問題

音空間の可視化や解析、音源位置や室内音響パラメータの推定など、音場計測における種々の逆問題に対し、最適化や機械学習など様々なアプローチから新たな方法論を探求し、システムとしての構築を行う。



音場の記録・伝送・再生のための信号処理

音場の記録、伝送、再生に関わる諸問題を基本原理から応用まで広く扱い、遠隔コミュニケーションやバーチャルリアリティなどを目的とした新しいシステムを、これらの方法論に基づいて実現する。

音声合成変換によるコミュニケーション拡張

深層学習を含む機械学習論的な手法を適用し、音声を人工的に合成・加工することで、ヒト・人工知能間の音声コミュニケーションを拡張する。

- Topics [最近の受賞]
2018年3月 電気通信普及財団テレコムシステム技術賞奨励賞（北村特任助教、猿渡教授）
2018年3月 日本音響学会学生優秀発表賞（瀧田雄太）
2017年12月 IEEE SP Society Japan Student Best Paper Award (三井祥幹)
2017年12月 IEEE SP Society Tokyo Joint Chapter Student Award (齋藤祐樹)
2017年6月 電子情報通信学会業績賞（猿渡教授）

ミニアンケート

研究室のアピールを一言でお願いします

A 音という物理波動から統計的・機械学習論的なアプローチで「宝探し」をするのが魅力です。

第2研

システム情報

眞溪研究室

<http://www.isp.ac/>

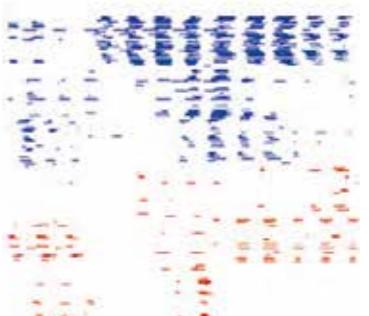


眞溪 歩 准教授
Ayumu MATANI

Theme

脳とシステム：

システム論にもとづく手法を用い、脳機能を計測・解析し人間が幸福に過ごせるように脳に働きかける研究を行っている。現在の当研究室オリジナルの研究テーマとして、以下の3つが挙げられる。



経頭蓋細胞外インピーダンス制御(tEIC)による脳機能の促進と抑制

人間の頭部に非侵襲に抵抗を取り付けると、それは必ず並列接続になるので、神経電源から見たインピーダンスは減少する。したがって、神経電源から流れ出る樹状突起電流は増加し、膜電位を過分極側へシフトさせる。抵抗を負性抵抗に変えると、その効果を増大できるばかりでなく、過分極側へもシフトできる。この技術(tEIC)を利用し、脳機能を変調する研究を行っている。たとえば、ボタン押し課題では有意な反応時間の短縮を確認している。

情報標識追跡法

20世紀の脳神経科学は、染色から始まりPET・ORなど、物質への各種の標識追跡法によって牽引されてきた。これに対し、事象関連電位計測において、情報を標識し脳内情報処理の様子を追跡・検定する手法を開発している。この基礎となる技術は、携帯電話の通信に用いられる擬似乱数系列による実験コーディング・脳波デコードイングとブートストラップ検定である。

人間の磁気感受性の計測と再獲得

人間は、磁気感受性を有する生物と同じようにマグネタイドなどの器官を有しており、かつては、あるいは現在でも無意識下では磁気感受性を有しているかもしれない。動物実験などで得られた知見や、上記の情報標識追跡法を利用して磁気誘発脳波の計測を行い、上記のtEICによってその再獲得を目指している。磁気感受性から離れて本研究を一般化すると、無意識下での情報処理の研究といえる。

ミニアンケート

「システム情報学」とはどんな学問か、一言で教えてください

A 直感を理詰めしシステム化する理工学

奈良研究室

<http://www.inv.ipc.i.u-tokyo.ac.jp/>



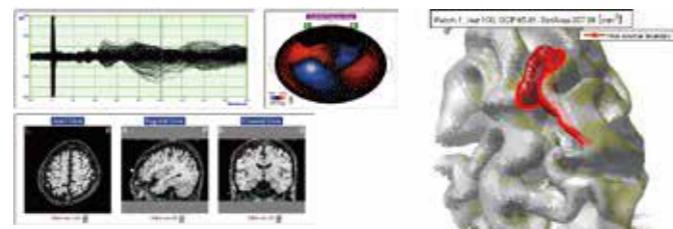
奈良 高明 教授
Takaaki NARA

Theme

逆問題の数理と計測：因果律を逆にたどり測定データから対象の情報を得る間接計測・逆問題に対して、原因を観測データから直接再構成する数理手法、およびそのために必要なデータの計測構造を開発している。具体的な研究テーマは以下の通りである。

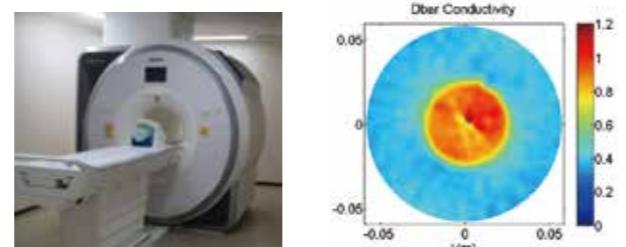
脳磁場逆問題の直接代数解法と動的輪郭モデル

頭部表面で観測した磁場データから脳内の神経電流源を推定する逆問題に対して、函数論を応用し、複数の双極子ソース位置を代数方程式の解として求める直接代数解法を構築している。また広がりを持ったソースに対し、電流源領域の境界に沿う線積分によって表現する新たな順問題解を導出し、動的輪郭モデルにより境界を決定する手法を開発している。



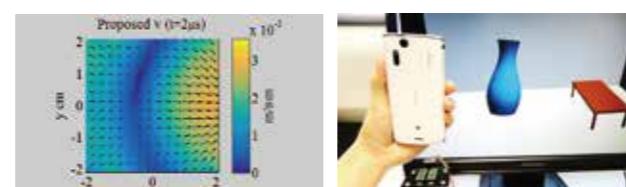
Dbar方程式解析と応用

二次元波動場を非齊次のコーシー・リーマン方程式により記述し、波動の双対量の一方から他方を再構成する理論を構築する。電磁波への応用として、MRIで計測した磁場から導電率・誘電率を推定し、癌や脳腫瘍を画像化する手法を開発する。また音波への応用として、粒子速度計測や音源推定、インピーダンス推定手法を開発する。



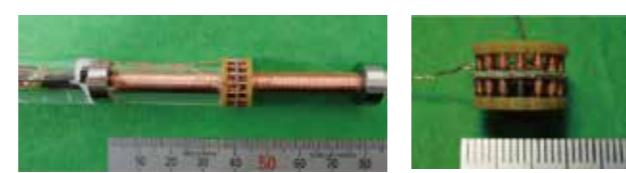
非破壊検査のための計測構造

発電所配管、構造物、燃料電池などの欠陥部位を同定するため、漏洩磁束や渦電流を用いた新しい数理・計測手法を開発する。欠陥の周りに発生する場のフーリエ係数、ローラン係数を直接計測するセンサを開発する。



発振機探索とユーザインタフェース

瓦礫埋没者の持つピーコンから発せられる磁場を計測し、埋没者の位置を特定するためのセンサ・アルゴリズムを開発する。また、IoT環境において、物体にはりつけられたRFIDタグやスマートフォンの位置を屋内で検出する手法を開発する。



Topics [最近の受賞]

2017年度計測自動制御学会学術奨励賞（三好裕之）/ 2016年度電子情報通信学会MII研究奨励賞（伏見幹史）

ミニアンケート

研究室のアピールを一言でお願いします A 物理場の計測を美しい数理で行う逆問題の研究を通して計数の醍醐味を共に味わいましょう。

篠田・牧野研究室

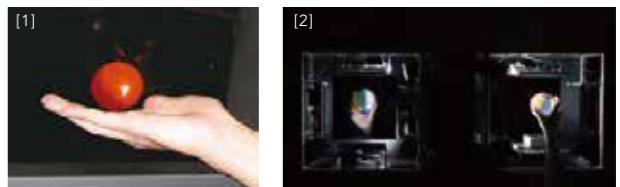
<http://www.hapis.k.u-tokyo.ac.jp/>



篠田 裕之 教授
Hiroyuki SHINODA
牧野 泰才 準教授
Yasufumi MAKINO

Theme

システムの中に新しい物理現象や物理的構造を導入することで、従来の壁を越える実世界情報環境を実現する。特に人間、環境、その相互作用のセンシングや、五感、特に触覚に働きかけて人間を支援する技術について、ハードウェアレベルからの提案を行っている。斬新な発想に基づく基礎的・普遍的成果を目指すとともに、それらが人々の問題を解決し、実用技術として幅広く活用されるまでのプロセスも研究テーマに含まれる。

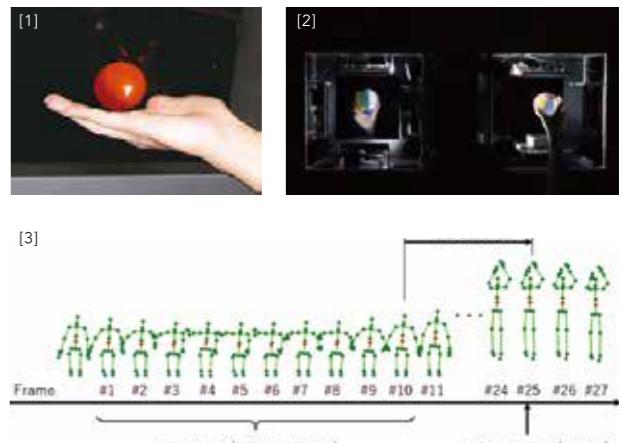


触覚インタフェース

人間の身体の表面に余すことなく備わっている触覚に注目し、触覚を活用する新しい情報システムの研究を行っている。触覚受容器の物理的な知覚特性をはじめ、人間の知性・知能の根底を支える心や感情と触覚がどのように関係しているかを解明し、触覚への刺激によって人間の生活・行動を支援するシステムを具体化する。

身体動作情報と機械学習

人が他者や物とインタラクションする際に無意識的に現れる動作の特徴を利用し、多様な情報を推定する。人の身体動作情報を元に機械学習を利用することで、近未来の動作の予測や、触れているものの硬さ、重さなどの推定を行う。



二次元通信

薄いシート内を伝播する電磁波によって情報と電力を伝送するシステムを研究する。生活環境での安全なワイヤレス電力伝送・無線と干渉しない高速信号伝送などの技術を確立し、ワイヤレス・バッテリーレスの新しい情報環境を提案する。また、微小なセンサや機能部品を大面積の柔軟体に分布・連携動作させる技術を確立し、ロボットの人工皮膚やウェアラブルコンピューティングなどに応用する。



複雑理工学 at 柏キャンパス

既存の個別学問分野から派生する未開拓の領域を研究テーマとし、人類が解決を迫られている重要課題に取り組む。複雑システムとしての人間・社会の問題を、物理情報学をツールとして解決する。



Topics [最近の受賞]

2017年度日本バーチャルリアリティ学会学術奨励賞（田島優輝）/ 2017年度日本バーチャルリアリティ学会学術奨励賞（堀内悠生）
IDW'17 I-DEMO Award (Y. Makino, Y. Horiuchi, and H. Shinoda)
IEICE 短距離無線通信研究会優秀学生賞（増田祐一）

ミニアンケート

専攻 / コースの魅力を一言で教えてください A 専攻（コース）内の研究分野の幅が広く、多様な角度から世界を理解できるようになります。

津村研究室

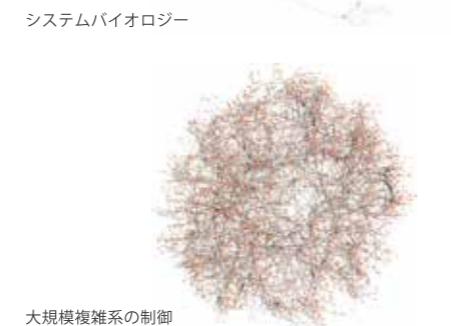
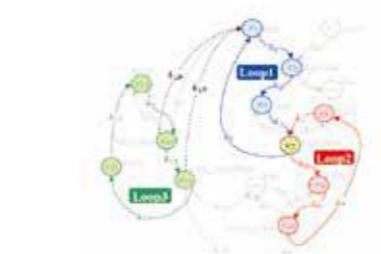
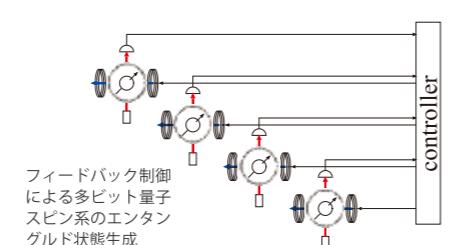
<http://www.cyb.ipc.i.u-tokyo.ac.jp/members/tsumu/index-j.html>



津村 幸治 準教授
Koji TSUMURA

Theme

本研究室の主たる研究テーマは、システム制御理論の基礎理論とその応用である。特に最近、システム制御理論と情報理論／物理学／システム生物学等との新たな融合をはかり、大規模複雑系や協調連携するマルチエージェントシステム／ネットワークドAI、複雑なネットワークで制御されているバイオシステム、多数の量子システムが連結したネットワークド量子制御系などの解析／設計を目指している。



システム制御理論の新領域への展開（サイバネティクス）

社会システムの制御：プライシング・分散最適化アルゴリズム等を用いた社会システム・電力ネットワークの制御に関する研究。

量子力学系の制御：量子コンピュータ等、量子状態を利用した情報システムの実現において重要となる、量子状態の制御について研究する。

バイオシステムの制御：遺伝子ネットワーク・胞ネットワークなど生体系のダイナミクスを対象とし、そのメカニズムの解析・設計を目指す。

分散最適化アルゴリズム：制御理論の概念に基づく分散最適化アルゴリズムの一般化と高速化を目指す。

制御系解析 / 設計

制御理論と情報・通信理論の融合：制御システムを流れる信号の複雑度と制御性能の関係解明、および通信容量制約下の制御系設計手法の確立を目指す。

マルチエージェントシステムの制御：複数のエージェントが連結したマルチエージェントシステムの合意や集団的協調動作のための分散制御系設計の確立を目指す。

大規模複雑系の制御：多数のサブシステムがネットワーク結合した大規模複雑系の制御／設計に関する研究。

モデリング / システム同定

モデリングの基礎理論：不確かさの量化、ロバスト制御・最適制御のためのモデリング手法を確立する。

システム同定：時変システム、非線形システム、大規模複雑システム、階層化システムに対するシステム同定の手法を開発する。

多分解能階層化ネットワークモデリング：生体・スマートグリッド等の大規模複雑な動的システムについて、そのマルチスケール性の特徴を的確に捉えたモデリング理論を創出する。



ミニアンケート | 専攻 / コースの魅力を一言で教えてください 「見て・考えて・はたらきかける」という工学の魅力が網羅された専攻・コースです。

石川・妹尾研究室

<http://www.k2.t.u-tokyo.ac.jp/>



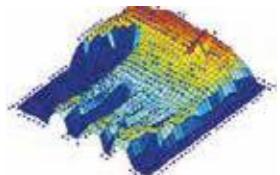
石川 正俊 教授
Masatoshi ISHIKAWA



妹尾 拓 講師
Taku SENOO

Theme

知能システムを半導体集積化技術や光学素子などの新しいデバイス技術と並列情報処理技術を利用して、高度なレベルで実現することを目指している。すなわち、人間の五感に相当する感覚機能、脳の情報処理に相当する階層的並列処理機能、運動系に相当するメカニズムを工学的に実現し、それらを統合することで、知能システムを人間を超える性能で実現することを目指している。現在の主な研究テーマとして、以下の四つがある。



センサフュージョン

センサフュージョンの目標は、複数の感覚情報や運動情報に対して階層的並列分散処理に基づく統合・融合を施すことにより、柔軟な認識行動能力を持つ知能ロボットシステムを実現することである。具体的には次の研究を行っている。(1) 感覚運動統合システム、(2) 多指ロボットハンド、(3) ダイナミックマニピュレーション、(4) ロボットビジョン、(5) アクティブセンシング、(6) 学習理論。

ビジョンアーキテクチャ

ビデオフレームレートを上回る高速リアルタイムビジョンを実現するためのシステムアーキテクチャのデザインとその研究開発を行っている。並行して、高速ビジョンのための独自の画像処理理論や新しい応用に関する研究も行っている。(1) 高速ビジョンシステム (2) ビジョンセンサ・ビジョンプロセッサ (3) 高速画像計測・認識 (4) マンマシンインタフェース。

ダイナミックイメージコントロール

様々なダイナミクスを有する現象に対して、光学系・照明系・処理系などをうまくコントロールすることで、通常では見ることができない対象や現象の映像を人間にとてわかりやすい形で提示する技術の研究を行っている。具体的には次の研究を行っている。(1)マイクロビジュアルフィードバック制御、(2)高速可変焦点レンズ、(3)高速光学系制御による動的映像計測。

アクティブパーセプション

実世界の新たな知覚手法を研究すると同時に、その技術を元に新しい対話の形を創造する。ヒューマンコンピュータインターフェース、メディアアート、倫理学等の分野を広く研究している。具体的には次の研究を行っている。(1) メタディスプレイ、(2) 3次元入力、(3) 感覚拡張型バイオフィードバック、(4) ロボット倫理、コンピュータ倫理。

創造情報学

意味のある新しい情報システムの創造を目指して、システム構築の3要素である、1) 計算理論、2) 情報表現とアルゴリズム、3) ハードウェアに関して、その限界性能を追求するとともに、システムとしての新規性や可能性を追い求めている。大学の外部との連携も視野に入れ、社会が受け入れるシステムの創造を目指す。

Topics [最近のニュース]

高速2足走行ロボットを新たに実現し、国際ロボット展2017で展示。時速100kmで走行中の自動車から、高速道路のトンネル壁面を検査するシステムを実現。

ミニアンケート | 研究室のアピールを一言でお願いします 価値を創造する「場」を大切にし、基盤技術から応用展開まで様々な研究に取り組んでいます。

Hiroshi_Nakamura@ipc.i.u-tokyo.ac.jp
03-5841-6915
工学部1号館 507号室
kondo@hal.ipc.i.u-tokyo.ac.jp
03-5841-0445
工学部6号館 247号室

第8研

システム情報

中村・近藤研究室

<http://www.hal.ipc.i.u-tokyo.ac.jp/>



中村 宏 教授

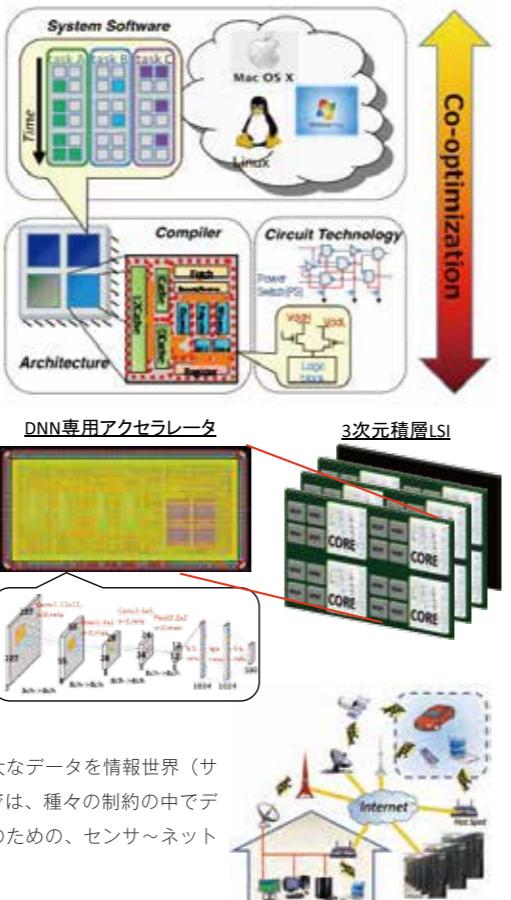
Hiroshi NAKAMURA

近藤 正章 准教授

Masaaki KONDO

Theme

物理世界と情報世界の高度なインタラクションの実現を目指し、高速性・低電力性・信頼性・安全性・快適性などを備える高品質なコンピューティングの実現を目指している。この目標に向けて、回路実装・アーキテクチャ・システムソフトウェアの連携・協調による超低消費電力 VLSI システムの開発、コグニティブコンピューティング、超高性能計算システム、IoT / サイバーフィジカルシステムに関する研究を行っている。



超低消費電力VLSIシステム

半導体集積度の向上に伴い、リード电流による消費電力の増大などの問題が顕在化し、消費電力の飛躍的な低減がVLSIシステムに求められている。そこで、デバイス回路実装・アーキテクチャ・システムソフトウェアが階層を越えて連携・協調することで、極めて低い消費電力で高い性能を達成するVLSIシステムの実現を目指す研究を行っている。

- ・細粒度電源制御を実現する回路技術
- ・モデリングと状態監視による効率的なプロセス管理・電源制御手法
- ・次世代不揮発メモリを用いたノーマリーオフコンピューティング
- ・誘導結合を利用した3次元VLSIシステムの構成方式

コグニティブコンピューティング

ビッグデータの利用や計算機処理性能の向上、機械学習手法の発展等を背景に、AI技術が大きな進化を遂げている。本研究室では将来におけるAI技術の社会応用を目指し、深層ニューラルネットワーク向けのアクセラレータや、高効率な深層学習手法、リアルタイム性と全データ性を両立するAI処理基盤の開発などを行っている。

IoT / サイバーフィジカルシステム

物理世界（フィジカル）のあらゆるものをインターネットで接続し、そこから得られる膨大なデータを情報世界（サイバー）で集約して利活用するIoT（Internet of Things）技術が注目されている。IoTでは、種々の制約の中でデータを効率的に処理することが求められる。そのため、センサ～ネットワーク～サーバを一貫して最適化する設計方法論とアーキテクチャを研究している。



Topics [最近の学生の受賞]

- ・高田 遼君 : Outstanding M2 Student Award (The 2017 cross-disciplinary Workshop on Computing Systems, Infrastructures, and Programming)
- ・東 耕平君 : Poster Award (The 2017 cross-disciplinary Workshop on Computing Systems, Infrastructures, and Programming)
- ・シュレスタマリ サソット君 : 若手奨励賞, 情報処理学会システム・アーキテクチャ研究会

ミニアンケート

Q 研究室のアピールを一言でお願いします

A とにかく楽しく研究できる研究室です！（近藤先生）

Q 専攻 / コースの魅力を一言教えてください

A 物理世界と情報世界を繋ぐという目標に向かって、広い分野からアプローチしています。だから、広く深く学べ、大きな達成感を得られます。（中村先生）

Koji_Ikuta@ipc.i.u-tokyo.ac.jp
工学部6号館 243号室
ikeuchi@micro.rcast.u-tokyo.ac.jp
03-5452-5162
先端研4号館 506号室

第9研

システム情報

生田・池内研究室

<http://www.micro.rcast.u-tokyo.ac.jp/>



生田 幸士 教授

Koji IKUTA

池内 真志 講師

Masashi IKEUCHI

Theme

現状技術では実現困難な次世代医用工学の創成を目的とした研究と教育を行っている。バイオマイクロマシンや医用ロボティクスが進展すれば、現在では想像もできない高度な医用福祉機器やバイオテクノロジシステムが実現できる。概念提案と実証開発を推進している「化学ICチップ」や「光駆動ナノマシン」は、医学だけでなく生命科学全般の強力な研究ツールとなる。本研究室で世界に先駆け開発された能動内視鏡や能動カーテル、化学ICチップ、マイクロ光造形法（IHプロセス）等は、世界的規模で追従研究が開始されつつある。新原理と新発想をキーワードにしたユニークな研究テーマ群は、すべて「夢のある」もので、博士課程のテーマとして最適である。



バイオマイクロマシン

レゴキットのように複数のマイクロ化チップを結合して様々な分析・合成系を構築できるユニークな「化学集積回路」（化学ICチップ）の基盤技術の創製と、体内埋め込み型デバイス、システム生物学応用を進めている。20世紀のエレクトロニクスの進展が高度情報化社会をもたらしたように、本プロジェクトで展開される化学ICチップが21世紀のバイオ医療を革新する。最近では、人工毛細血管や再生医療用ナノデバイス、体内埋め込み型化学ICチップなどの開発にも注力している。

マイクロ光造形法と光駆動ナノマシン

3次元マイクロマシン作製手法の草分けであるマイクロナノ光造形法を駆使し、世界最小の10ミクロンの遠隔操作ロボットの試作に成功している。数ミクロンサイズの生きた細胞からの反力を感じながらレーザ光で微細操作できるシステムも完成。

新原理メディカルロボティクス

未来の医療用ロボティクス・メカトロニクスの実現には、従来のメカトロニクスの流用では限界がある。この理由は、工業と医療ではメカトロニクスに対するニーズに大きな隔たりがあるからである。そのため医療メカトロニクスの構築が重要となる。この観点から、単に新しい医療機器の個別開発だけに留まらず、医療メカトロの基盤技術全体の向上を目的とした次世代のロボティクスを探求している。脳内など深部臓器の遠隔微細手術を可能にする「マイクロフィンガー」など、名医でもツールが入らない部位の手術にトライしている。

発症前検知用ポータブルデバイス

従来の癌マーカより早期に放出されるマイクロRNAを検出し、発症前に治療開始できる予防医療革命の鍵となるマイクロデバイスの開発。

Topics [最近の学生の受賞]

博士課程の川口達也君の論文 "Independent Actuation and Master-Slave Control of Multiple Micro Magnetic Actuators" が、2018 IEEE International Micro Electro Mechanical Systems Conference (MEMS 2018)において、Outstanding Student Paper Award Finalist にノミネートされました。

ミニアンケート

Q 研究室のアピールを一言でお願いします

A 面白いと思えることが第一！

稻見・檜山研究室

<https://star.rcast.u-tokyo.ac.jp/>



稻見 昌彦 教授
Masahiko INAMI



檜山 敦 講師
Atsushi HIYAMA

Theme

生理的・認知的・物理的知見に基づいて、システムとしての身体の機序を追究し、人間が生得的に有する感覚機能、運動機能、知的処理機能を物理的、情報的に補償・拡張する「身体情報学」に関する研究を行っている。機器に代替作業をさせる「自動化」と並立する概念として、機器や情報システムを自らの手足のように自然に利用し、いわば“人機一体”でやりたいことが自在にできる「自在化」技術を提唱している。

自在化技術

「人機一体」を実現するためにはユーザの意図を適切にセンシングし、作業対象の情報をユーザの身体に適切にフィードバックする必要がある。視線、筋電などの生体情報や環境情報のセンシング技術、機械学習等による意図推定・行動予測技術、筋電気刺激などのアクチュエーション技術を統合し、人間の入出力を拡張する研究開発を行う。

[1]: MetaLimbs: Multiple Arms Interaction Metamorphism
[2]: Aerial-Biped



新たな身体性の獲得

バーチャルリアリティ、拡張現実感、ウェアラブル技術、ロボット技術、テレイグジスタンスなどを援用し、人間の能力を拡張することで、超身体、脱身体、変身、分身、合体など、新たな身体観を工学的に獲得するための研究開発を行い、超高齢社会対応など社会実装することを目指す。

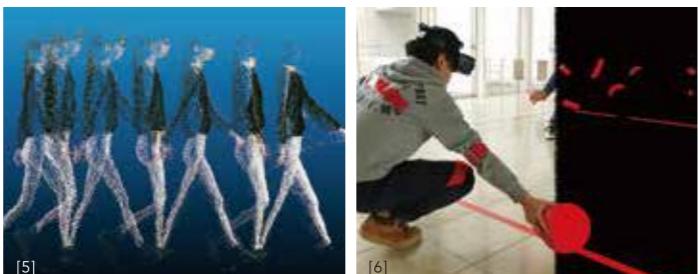
[3]: Optical Camouflage (撮影:Ken Straiton)
[4]: VR くまモン



主観的体験の共有・伝達技術

主観的な体験・経験を身体や時空間に広がる視覚・聴覚・触覚として記録、再生、伝達するシステムを構築し、サブリメントのように日常生活の質(QoL)を豊かにする技術の実現を目指す。エンタテインメントコンピューティング、超人スポーツ、技能伝承などの領域へ向けた研究開発を展開する。

[5]: VR 姿勢計測技術 [6]: D-Ball: Virtualized Sports using Diminished Reality



Topics [最近のニュース]

- 稻見教授が研究に関わっている、MetaLimbsがSIGGRAPH Emerging Technologies Best in Showおよび2017アジアデジタルアート大賞展インタラクティブアート部門にて大賞/総務大臣賞を受賞しました。
- 稻見教授が共同代表を務める超人スポーツ協会がグッドデザイン賞を受賞しました。
- 檜山講師が「超高齢社会2.0: クラウド時代の働き方革命」(平凡社新書)を出版しました。

ミニアンケート

- Q 研究室のアピールを一言でお願いします
A 新たなことにチャレンジしたい学生を待っています。(稻見先生)
- Q 専攻 / コースの魅力を一言で教えてください
A システム的思考が世の中のあらゆる分野に展開可能であることを知れることですね。(檜山先生)

柏野研究室

<http://www.kecl.ntt.co.jp/people/kashino.kunio/ut-ist/>



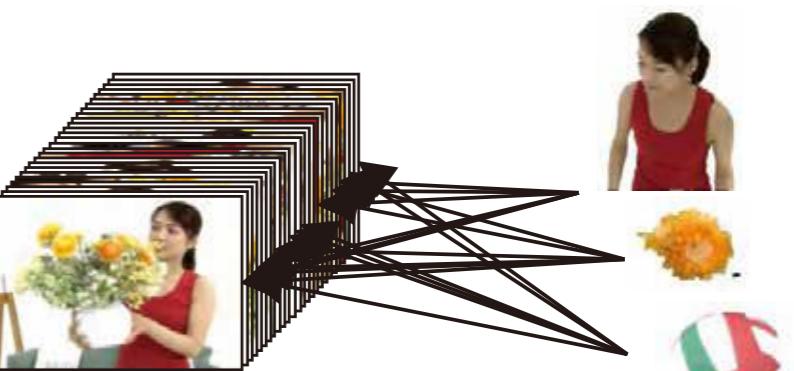
柏野 邦夫 客員教授
Kunio KASHINO

Theme

音・画像・動画などのメディアデータの解析、探索、認識、生成技術の研究により、膨大かつ多様なメディアデータを活用した新たな価値創造や、メディアデータを介した質の高いコミュニケーションの実現を目指しています。

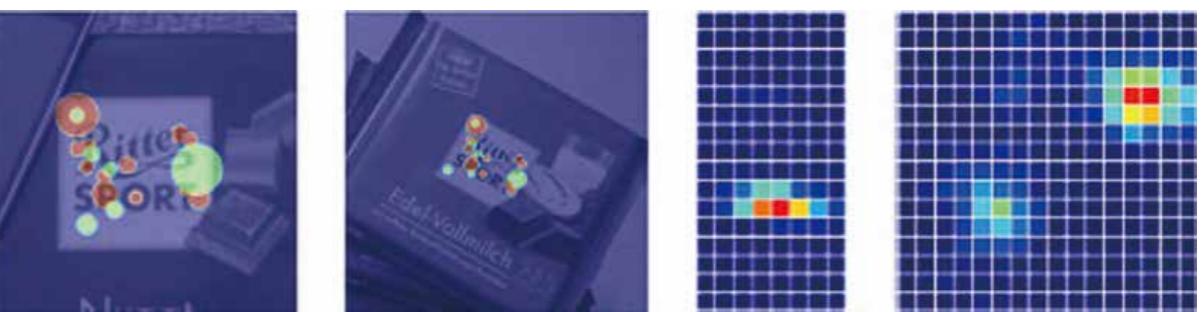
メディア解析

人メディアデータに含まれている有益な情報を取り出すための技術体系を構築する。例えば、音や映像に含まれている物事を多面的に記述する情景解析や、複数のデータ間に潜む微細な差分を検出し有用な情報として取り出す詳細差分検出の研究などに取り組んでいる。



メディア探索・認識

膨大な量のメディアデータを効率的に扱うための技術基盤を構築する。例えば、高次元データに対する極めて高速な探索を目指す近似近傍探索、複数のデータ間の関係性や整合性に着目して高精度な探索を実現するロバスト探索、あるいは、音、画像といった単一種類のメディアデータだけではなく複数種類の情報を組み合わせて用いることで高度な処理を実現するクロスモーダル探索・認識の研究などに取り組んでいる。



メディア生成

メディア解析技術に根差した高品質なメディアデータの生成・提示技術を提案する。例えば、人間の音声生成過程のモデルに基づく高品質の音声生成や音声変換、人間の状態や行動の解析に基づく効果的なインストラクション生成などに取り組んでいる。

ミニアンケート Q 専攻 / コースの魅力を一言で教えてください A 多様かつ複雑な現実の問題に体系的に切り込む腕力を鍛えられる。

品川研究室

<https://www.os.ecc.u-tokyo.ac.jp/>



品川 高廣 准教授
Takahiro SHINAGAWA

Theme

オペレーティングシステム（OS）や仮想化ソフトウェアをはじめとした最先端のシステムソフトウェアに関する研究をおこなっている。Linux や Windows 等の既存 OS のカーネルや、我々の研究室で独自に研究開発している仮想化ソフトウェア「BitVisor」などをベースとして、セキュリティや信頼性向上、システム管理、クラウドコンピューティング、ビッグデータ処理、Internet of Things (IoT) などに関する研究開発をおこなっている。

オペレーティングシステム／カーネル

オペレーティングシステム（OS）は、物理世界のハードウェアと情報世界のアプリケーションを繋ぐ架け橋となるソフトウェアである。特にOS のカーネルは、ハードウェアとソフトウェアの境界領域で動作し、システム全体の状態を把握・制御する特権を持っている。従って、OS カーネルはシステムの性能や機能、安全性などを大きく左右するコンポーネントである。本研究では、Linux や Windows などの既存の OS をベースとして、OS カーネルに手を入れることで、セキュリティ向上やストレージ高速化など、様々な機能向上や性能改善を実現するための研究開発をおこなう。また、次世代コンピュータ向けに、本研究室で独自の OS を研究開発して、OS の新しいコンセプトを提案することも目指している。

仮想化ソフトウェア「BitVisor」

仮想化ソフトウェア（仮想マシンモニタやハイバーバイザ等と呼ばれる）は、ハードウェアと OS の間に入り込んで動作して、ハードウェアを仮想化して OS に見せることにより、新たな機能を提供するためのソフトウェアである。当研究室では、ゼロから新たに開発した国産の仮想化ソフトウェアである「BitVisor」をベースとした研究を数多くおこなっている。従来の VMWare や Xen、KVM などの仮想化ソフトウェアの多くは、1 台のハードウェア上で複数の OS を動作させることを目的としているのに対し、BitVisor は仮想化技術を活用してセキュリティやシステム管理など新たな機能を OS に依存せずに実現することを目的としている。動作する OS を 1 つに限定することにより、仮想化ソフトウェアのオーバーヘッドやサイズを大幅に削減することが可能になっている。

セキュア・コンピューティング

OS カーネルや仮想化ソフトウェア、さらにはコンバイラやアプリケーションとも連携することで、システム全体としてセキュアなコンピューティング環境を提供することを目指している。例えば、OS カーネルによる保護機構とコンバイラによる保護命令を組み合わせることでバッファオーバーフロー攻撃に対する仕組みを構築したり、アプリケーションを特権分割して攻撃時の被害を最小限に抑える仕組みを構築したりする手法に関する研究開発をおこなっている。また、OS のセキュリティポリシー記述が複雑になる問題を軽減するために、オブジェクト指向言語により OS カーネルのポリシー記述をおこなう方式の研究もおこなっている。

Topics [最近のニュース]

2017年9月にシステムソフトウェアの分野で著名な国際会議 APSys 2017 で、仮想化技術により Linux アプリケーションを macOS 上で動作させる技術を発表しました。また2017年12月には、BitVisor Summit 6 を開催しました。仮想化技術の深い話が満載で、非常に中身の濃い会議となりました。また、博士課程の学生2名が国際会議 IEEE CloudCom 2017 で研究成果を発表しました。

ミニアンケート

研究室のアピールを一言でお願いします A システムソフトウェアは、ハードウェアの仕組みを理解して完全に制御できるのが非常に面白いところです。

上田研究室

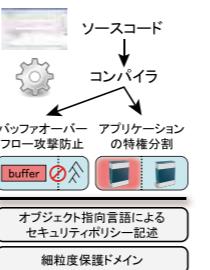
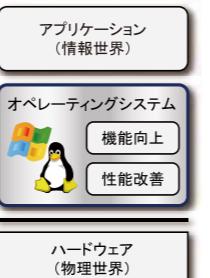
<http://sys-pharm.m.u-tokyo.ac.jp/>



上田 泰己 教授
Hiroki UEDA

Theme

意識・自我・知性の自然科学的な解明を目指した基礎研究やその解明に資する技術開発を行っている。我々の研究室で開発した全身・全脳を透明化し全細胞解析を実現するCUBIC技術 (Susaki et al, Cell, 2014, Tainaka et al, Cell, 2014)、睡眠・覚醒リズムの非侵襲的な解析を可能とするSSS技術、交配を用いない次世代遺伝学技術であるTriple-CRISPR (Sunagawa et al, Cell Reports, 2016, Tatsuki et al, Neuron, 2016) やESマウス技術 (Ode et al, Molecular Cell, 2017) 等を駆使しつつ、必要に応じて技術を新規に開発し、意識・自我・知性をはじめとした人類史上の難問に挑む方を募集する。



細粒度保護ドメイン

「意識」の神経基盤の解明に向けた基礎研究・技術開発

これまでに、睡眠・覚醒リズムのモデル化の成功により、睡眠状態・覚醒状態に関しては、急速に理解が進んできている（図1）。しかし、「意識」の理解にはまだ至っていない。ここでは、「意識」を支える最小限の神経基盤を同定し、その神経回路が生み出す動態を観察・制御・再現することで「意識」の神経基盤に迫る研究を展開する。これまでに、大脳皮質と視床の間には大規模に並列化された神経回路ループがあり、「意識」の神経基盤と想定されているが、その機能的な証明はまだない。睡眠・覚醒リズムを非侵襲的に解析するSSS技術を用いることで「意識」を失う状態を定量的に測定し（図2）、次世代の遺伝学技術を用いて様々な脳部位の神経細胞に摂動を加えることで、最小限の神経基盤を同定する。次に、同定された神経細胞の動態を観察することで意識を支えるダイナミクスを定義する。さらに、それらの神経細胞間の回路を包括的に同定することを通じて、意識を生み出す神経回路基盤を理解する。



図1 睡眠・覚醒の数理モデル（左：平均化神経モデル、中：モデルに用いたチャネル・ポンプ、右下：睡眠状態、右上：覚醒状態）



図2 非侵襲睡眠測定装置 SSS（左：睡眠測定チャンバー、右：睡眠測定ラック）：差圧センサーでチャンバー内の動物の呼吸パターンを自動分類することで睡眠・覚醒リズムを定量的に測定する。



図3 透明化されたマウス全身（左：成鼠、右：幼鼠） 透明化されたマウス脳

「自我」の神経基盤の解明に向けた基礎研究・技術開発

統合失調症では「自我」の崩れが観察される。統合失調症様症状を誘導したマウス脳を用いて全脳レベルで神経回路を観察し、「自我」と神経回路構造との相関・因果関係を解明する。全脳レベルでの神経回路観察技術の開発が重要となるため、全身・全脳を透明化し全細胞解析を実現するCUBIC技術（図3）を用いて、「自我」を支える神経回路の健常な状態とその壊れを理解する。

「知性」の神経基盤の解明に向けた基礎研究・技術開発

人は「知性」により大規模で柔軟な協調が可能である。空間的に途絶した神経細胞同士が如何に時間的に繋がるかを拠り所に大規模で柔軟な協調を可能にする神経回路の形成原理を解明する。全脳レベルの神経細胞動態の観察・摂動技術の開発が重要となるため、脳の深い部位を非侵襲的に摂動する技術を新規に開発する。

Topics [最近のニュース]

- 上田教授がUTOKYO VOICESに紹介されました。
- 上田教授が第4回イノベーター・オブ・ザ・イヤーを受賞しました。
- 吉田健祐さんが孫正義財団の準会員に採択されました。
- 久保田晋平さんが第31回 独創性を拓く先端技術大賞 フジテレビジョン賞を受賞しました。
- 可逆的リン酸化反応による自律的な空間パターンの形成に関する研究をCell Reports誌に報告しました。
- 日本語のプレスリリース：http://www.m.u-tokyo.ac.jp/news/admin/release_20170426.pdf
- 洲崎悦生講師が平成29年度科学技術分野の文部科学大臣表彰・若手研究者賞を受賞しました。
- ※他にも睡眠覚醒リズムを中心多くの論文・総説を発表しているので、興味がある方はぜひ下記HPをご覗ください。<http://sys-pharm.m.u-tokyo.ac.jp/index.html>

ミニアンケート

研究室のアピールを一言でお願いします A 睡眠覚醒をはじめとした脳機能を研究しています。

医学部ですが、数理や物理を専門とするメンバーもあり、多様性の中で己の独自性を探求できます！

斎藤研究室

<https://www.os.ecc.u-tokyo.ac.jp/>



斎藤 洋 教授
Hiroshi SAITO

Theme

数理及びデータサイエンスに基づく応用領域全般、特に、現実世界の情報を用いた情報通信システムや現実世界情報処理アルゴリズムの高度化を中心とした、情報群を制御する数理情報理論と応用システム構築への展開に関する研究開発を行う。

推定可能性、森羅万象センサ化アルゴリズム、応用システム

Internet of things や様々なセンサなどの発展により多くの現実世界の情報を瞬時に得ることができるように一つある。こうした情報を高度なアルゴリズムにより処理することで、センシング結果の直接的な情報以上のものが得られる可能性が出てきている。この状況に対して、①どのように情報を得られるのか（推定可能性）、②どのようにすれば得られるのか（森羅万象センサ化アルゴリズム）、③どのように産業応用するのか（応用システム）、に関わる研究を行っている。

具体的研究例

その端緒として、(i)これまで、現実世界の情報をほとんど利用していなかった情報通信システムに対して、現実世界の情報を用いて、高度化する研究、(ii)凸なセンシング領域をもつバイナリセンサ（特定対象物の有無を判定）や距離センサ（対象までの距離）をばら撒いた場合に、センサ位置情報なしで推定可能な対象物の形状パラメータに関する研究、などの研究を実施している。

(i)の例として、台風などの気象情報を取り込み、それに基づいて、ネットワーク上の機能配備等を変更することで、実質的に、災害から逃れる被災回避制御（図1）、や、災害に遭遇しにくいネットワークの幾何学的形状（図2）などの応用システム研究がある。

(ii)の例としては、推定可能性と森羅万象センサ化アルゴリズムの初期的な結果が得られている。推定可能性では、凸対象物については、バイナリセンサでは、大きさと周囲長のみが推定可能であり、凹凸不明の対象物については、距離センサでは、これに加えて凸性が推定可能であること、その他の対象物形状に関する情報は得られないことが分かっている。森羅万象センサ化アルゴリズムとしては、レーダ型距離センサの搭載車両がランダムな直線上を移動した場合、凸多角形対象物の形状推定を行うアルゴリズムが示されている（図3）。

図1. 被災回避制御の効果（上図：降雨量、下図：通信切断率）[H. Saito, H. Honda and R. Kawahara, INFOCOM, 2017]

図2. 地震に遭遇しにくいネットワークの幾何学的形状（左に行くほど、被災しやすくなる）[H. Saito, IEEE/OSA J. Lightwave Technology, 33:2, pp.443-458, 2015.]

図3. 車載距離センサによる連続測定を用いた形状推定 [H. Saito and T. Kimura, arXiv:1802.06882]

ミニアンケート



研究室のアピールを一言お願いします



理論と応用のバランスがとれた研究ができます。また、既存の研究分野にとらわれず、幅広い内容の研究ができます。

History 沿革

1945

現在の計数工学科の始まりは、第2次世界大戦の末期、東京帝国大学第一工学部に新設された計測工学科である。計測工学科
(1) 広い物理的知識とこれを自由に応用し得る能力を持ち、
(2) 現象を抽象化して論理的・数理的な体系を構成する能力を持ち、
(3) 総合的な立場から最適な技術を考案できる工学技術者を養成するという理念のもと、昭和20年（1945）4月に40名の第1回生を受け入れた。上記の理念は、その後70年以上の長きにわたり、計数工学科の教育方針として脈々として受け継がれている。

1951

昭和26年（1951）、新制大学への移行に伴い応用物理学科が新設され、新分野の開拓を先導する基礎工学の主要な分野として学生を教育することになった。これが計測工学コースの始まりである。わが国の産業の飛躍的な発展に伴って工学部も大きく拡張し、昭和37年（1962）に応用物理学科は計数工学科と物理工学科の2学科に発展的に改組され、計測工学コースの一部は物理工学科へ、大多数は数理工学コースとともに計数工学科を構成した。

1972

昭和47年（1972）には、多くの学科の教官が協力して教育・研究にあたる専攻として、大学院工学系研究科に情報工学専攻が新設され、その一つの情報処理工学講座が計数工学科に附置された。これを契機に、計数工学科の多くの教官が情報工学専攻を兼ね、情報工学専攻の中心的な役割を担い、工学系における情報分野の拡大を先導することとなった。

1993

平成5年（1993）に大学院が部局化され、計数工学科の教官の所属は工学部から大学院工学系研究科に移り、より先進的な教育・研究の一層の拡充を図ることになった。これがいわゆる大学院重点化である。この組織変更に伴い、計測工学コースの各講座は計測工学大講座に大講座化されると共に、計測制御システム工学原論講座が増設された。

1999

平成11年（1999）には大学院新領域創成科学研究科が新設され、計数工学専攻の教官の一部もその中の複雑理工学専攻に移り、生体や脳機能の計測と解明を中心とする新分野の創成を担当することとなった。

2001

この間、計数工学専攻は、従来の東京大学における情報関連の研究・教育体制を一体化し、理学系研究科と工学系研究科に分離していた情報系専攻を統合して格段に充実した教育と研究を行うため、学内外に向けて情報系の新たな研究科の創設を働きかけ続けていた。平成13年（2001）によくこれが実を結び、大学院情報理工学系研究科が設置され、これまでの計数工学専攻は大学院情報理工学系研究科の二つの専攻として発展的に改組され、計測コースを中心とする教官はシステム情報学専攻に移行した。この組織変更に対応し、学部教育を担当する工学部計数工学科のコース名称も、従来の計測工学コースからシステム情報工学コースに変更して現在に至っている。

